

俳林良材集

秋上

~ 5
6659



八五
6659

雙雀菴水壺翁撰

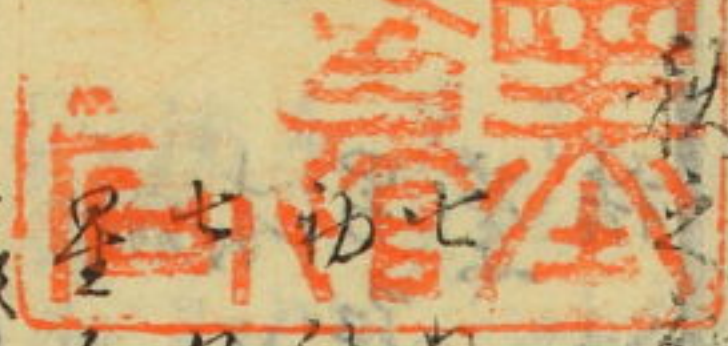
俳林良材集

秋部

二冊

書林

金生堂



秋部 題目録

一 文月
二 星の夜
三 星の夜
四 星の夜
五 星の夜
六 星の夜
七 星の夜
八 星の夜
九 星の夜
十 星の夜
十一 星の夜
十二 星の夜
十三 星の夜
十四 星の夜
十五 星の夜
十六 星の夜
十七 星の夜
十八 星の夜
十九 星の夜
二十 星の夜
二十一 星の夜
二十二 星の夜
二十三 星の夜
二十四 星の夜
二十五 星の夜
二十六 星の夜
二十七 星の夜
二十八 星の夜
二十九 星の夜
三十 星の夜
三十一 星の夜
三十二 星の夜
三十三 星の夜
三十四 星の夜
三十五 星の夜
三十六 星の夜
三十七 星の夜
三十八 星の夜
三十九 星の夜
四十 星の夜
四十一 星の夜
四十二 星の夜
四十三 星の夜
四十四 星の夜
四十五 星の夜
四十六 星の夜
四十七 星の夜
四十八 星の夜
四十九 星の夜
五十 星の夜

稲	六十七	九葉の若葉	葉	六十七	秋の葉	六十八
稻葉	六十九	且ち	梅	六十八	秋の葉	六十九
株	八十	梅	梅	六十九	秋の葉	七十
株		梅	梅	七十	秋の葉	七十一
木の実		梅	梅	七十一	秋の葉	七十二
柿		梅	梅	七十二	秋の葉	七十三
柿		梅	梅	七十三	秋の葉	七十四
柿		梅	梅	七十四	秋の葉	七十五
梨		梅	梅	七十五	秋の葉	七十六
栗		梅	梅	七十六	秋の葉	七十七
栗		梅	梅	七十七	秋の葉	七十八
栗		梅	梅	七十八	秋の葉	七十九
栗		梅	梅	七十九	秋の葉	八十
栗		梅	梅	八十	秋の葉	八十一

秋目二

秋の葉	廿二	朔	秋の葉	廿八	秋の葉	廿八
葉	廿三	朔	秋の葉	廿九	秋の葉	廿九
葉	廿四	朔	秋の葉	三十	秋の葉	三十
葉	廿五	朔	秋の葉	三十一	秋の葉	三十一
葉	廿六	朔	秋の葉	三十二	秋の葉	三十二
葉	廿七	朔	秋の葉	三十三	秋の葉	三十三
葉	廿八	朔	秋の葉	三十四	秋の葉	三十四
葉	廿九	朔	秋の葉	三十五	秋の葉	三十五
葉	三十	朔	秋の葉	三十六	秋の葉	三十六
葉	三十一	朔	秋の葉	三十七	秋の葉	三十七
葉	三十二	朔	秋の葉	三十八	秋の葉	三十八
葉	三十三	朔	秋の葉	三十九	秋の葉	三十九
葉	三十四	朔	秋の葉	四十	秋の葉	四十
葉	三十五	朔	秋の葉	四十一	秋の葉	四十一
葉	三十六	朔	秋の葉	四十二	秋の葉	四十二
葉	三十七	朔	秋の葉	四十三	秋の葉	四十三
葉	三十八	朔	秋の葉	四十四	秋の葉	四十四
葉	三十九	朔	秋の葉	四十五	秋の葉	四十五
葉	四十	朔	秋の葉	四十六	秋の葉	四十六
葉	四十一	朔	秋の葉	四十七	秋の葉	四十七
葉	四十二	朔	秋の葉	四十八	秋の葉	四十八
葉	四十三	朔	秋の葉	四十九	秋の葉	四十九
葉	四十四	朔	秋の葉	五十	秋の葉	五十
葉	四十五	朔	秋の葉	五十一	秋の葉	五十一
葉	四十六	朔	秋の葉	五十二	秋の葉	五十二
葉	四十七	朔	秋の葉	五十三	秋の葉	五十三
葉	四十八	朔	秋の葉	五十四	秋の葉	五十四
葉	四十九	朔	秋の葉	五十五	秋の葉	五十五
葉	五十	朔	秋の葉	五十六	秋の葉	五十六
葉	五十一	朔	秋の葉	五十七	秋の葉	五十七
葉	五十二	朔	秋の葉	五十八	秋の葉	五十八
葉	五十三	朔	秋の葉	五十九	秋の葉	五十九
葉	五十四	朔	秋の葉	六十	秋の葉	六十
葉	五十五	朔	秋の葉	六十一	秋の葉	六十一
葉	五十六	朔	秋の葉	六十二	秋の葉	六十二
葉	五十七	朔	秋の葉	六十三	秋の葉	六十三
葉	五十八	朔	秋の葉	六十四	秋の葉	六十四
葉	五十九	朔	秋の葉	六十五	秋の葉	六十五
葉	六十	朔	秋の葉	六十六	秋の葉	六十六
葉	六十一	朔	秋の葉	六十七	秋の葉	六十七
葉	六十二	朔	秋の葉	六十八	秋の葉	六十八
葉	六十三	朔	秋の葉	六十九	秋の葉	六十九
葉	六十四	朔	秋の葉	七十	秋の葉	七十
葉	六十五	朔	秋の葉	七十一	秋の葉	七十一
葉	六十六	朔	秋の葉	七十二	秋の葉	七十二
葉	六十七	朔	秋の葉	七十三	秋の葉	七十三
葉	六十八	朔	秋の葉	七十四	秋の葉	七十四
葉	六十九	朔	秋の葉	七十五	秋の葉	七十五
葉	七十	朔	秋の葉	七十六	秋の葉	七十六
葉	七十一	朔	秋の葉	七十七	秋の葉	七十七
葉	七十二	朔	秋の葉	七十八	秋の葉	七十八
葉	七十三	朔	秋の葉	七十九	秋の葉	七十九
葉	七十四	朔	秋の葉	八十	秋の葉	八十
葉	七十五	朔	秋の葉	八十一	秋の葉	八十一
葉	七十六	朔	秋の葉	八十二	秋の葉	八十二
葉	七十七	朔	秋の葉	八十三	秋の葉	八十三
葉	七十八	朔	秋の葉	八十四	秋の葉	八十四
葉	七十九	朔	秋の葉	八十五	秋の葉	八十五
葉	八十	朔	秋の葉	八十六	秋の葉	八十六
葉	八十一	朔	秋の葉	八十七	秋の葉	八十七
葉	八十二	朔	秋の葉	八十八	秋の葉	八十八
葉	八十三	朔	秋の葉	八十九	秋の葉	八十九
葉	八十四	朔	秋の葉	九十	秋の葉	九十

神	六四	小宮	六八	引板	七十八	經葉耐	八十九
焼帛	六十九	崔為皓	七十七	哉敷を恋	七十八	經葉耐	八十九
尾城鴨	、	綱代赤	、	赤崎若	九十二	、	、
衣倉之部	、	、	、	、	、	、	、
枝三	十三	枝三	十四	松茸	、	青藜麦	十六
こぎ束	、	西成	、	蓮の飯	十五	刺鱈	十六
附の家	廿二	熱麦	四十	焼束	四十二	夜打	五十六
蓬海	七十一	冷海	七十二	九月小神	三十八	ゆ色	八十二
ゆきゆ	八十三	秋束	八十八	新藜麦	、	新海	、
湯り伝	八十九	、	、	、	、	、	、
神	、	、	、	、	、	、	、
秋	四	門茶	五	小宮	、	籾	十
送の峯	、	六色糸	十一	近鐘	、	摸買	、
子日法	、	中茶糸	、	冬の月	十二	施儀鬼	、
玉糸	、	中茶	、	杵経	、	近火	十三
坂の馬	十四	麻光若	、	墓糸	十五	生舟玉	、
焼ゆ	十六	切糸	、	三井古女伝	十七	つくと入	、

秋目三

経木流	十八	近火	、	大文字火	、	秋法火	、
門火	十九	八幡安成火	、	解反字	、	友出納	、
地鏡糸	、	種屋	、	四水村糸	二十四	堺天神糸	、
心鏡糸	、	白髪開此	、	教賀糸	、	生を放	、
放生會	、	津八幡糸	四十五	八幡糸	、	志賀八幡糸	、
卷浦糸	、	宇依糸	、	菊崎糸	、	菱大島糸	四十八
彼岸	、	山雲糸	、	葉名糸	、	死侍松糸	、
秋社	四十九	因柱之角力七十一	、	舍利糸	、	醒碓糸	七十二
寄宮糸	、	秋糸	、	奥布糸	、	生玉糸	、
四ノ宮糸	七十三	下島相糸	、	例幣	、	山雞餅	、
任古角力糸	、	任古糸	、	室市	、	井市	、
白河糸	七十四	一茶糸	七十五	岩倉糸	、	小倉糸	、
栗田糸	、	一茶糸	、	勸学糸	、	神田糸	、
伊勢進交	、	夜長抄骨糸	、	島崎糸	、	山口糸	、
吳葉糸	七十六	宮後糸	、	磯利女糸	、	旅夷糸	、
八幡宮の政	、	上南与糸	、	天王寺隆頂	、	大森糸	、
定糸	、	天満鏡糸	、	木幡糸	、	菘糸	、
送彗糸	、	北山糸	、	堂广糸	、	鳴門糸	、

津村系、
 公事 坂道之部
 楸ノ葉裁く三 四十八 約述
 秋ノ文 御燈 七十 重慶寫
 四十八 靜真
 七十二 不悟田奏
 九十三

秋目四

俳林良枝集

秋之部

雙雀菴冰壺編集

秋

〔補〕少陰ハ西方酉ハ運多ク陰者運ク物を落キ時ニ秋ハ
 正ニ秋ハ鞭チリ物拏秋ニ成熟トス

〔箋〕日西陸を引(五)を秋云 〔鑿〕秋ハ向ウホク之秋天安ク後有ホク
 ○草木ハ秋ノキホク一説ホクニ万物秋ニホク零落一ハ是也志也
 商・明季・爽籜・少皞・蓐叔

七月

七月ノキ・八月ノキ・九月ノキ・十月ノキ・十一月ノキ・十二月ノキ
 夫則・季秋・相月・七夕ノ文をウーニキホク文をウケ月

とも文月とも云り夫則ハ七月の律より
 蘭月葉秋也云り

七月ノ季のつく星の光るの字

葉雅



文月

七月やふよき所住居

作太

七月や妹のせきをもて希是

徳之

七月の雨や富をふりぬいろ

サ女
子よ

直に津よき

八月やふよき老の衣ふれき

菊

八月や此のふりき娘の子

古
氏角

八月や老を寝のまうす叶あふ

梅室

八月や衣のふりきる文はのい

テハ
唯風

八月や子の種はあふ叶の芳

上
由縁

秋一

立秋

けきの秋・秋の初風
葉秋

八月や露の衣ふれき

ヒヤキ
素月

八月や河のゆふの空のむ

甘茶

立秋やまの上の露の衣

古
蒼乳

立秋の月秋の空のむ

葉二

八月秋の空のむ

露村

八月秋の空のむ

テハ
唯風

八月秋の空のむ

水休

八月秋の空のむ

楓九

今朝の秋

秋とらや庭の池の水を柳株
さしぬの浪も秋とら清く春、
二寸清くあもあえけきの秋
釣るあり松もあうり希きの秋、
岩もあもあうり希きの秋、
和のれ竹のうけりやあきの秋
あきとくやうけきの秋
とらの秋池もあえあうりあき
藝の葉もあき日あきやあきの秋

秋
一

立林

錢暑

初日あり

暮料の空伸るる希きの秋
種清く再びあきとらけきの秋
中もあき松もあきとらけきの秋
初秋のあき海あきぬ繩もあき
とら秋やとらあきとらけきの秋
はつ秋やあきあきとらけきの秋
清く末をあき初秋のあきとらけきの秋
あきとら秋もあきとらけきの秋

古
山
古
儀

柳散
 空しくも物におもひし柳なる
 西日さす田舎の家や舞臺なる
 伴のよき柳やさうあけし神る
 返屋をよき柳なる
 撮待
 葉
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待の門は清き水
 柳散 下毛 葉散
 種好
 舞臺
 下サ 十條
 下六 壺
 機
 巨月
 秋四

撮待
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待や名をかきさきさき
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待やゆきさきさきさき
 撮待の門は清き水
 撮待 下毛 葉散
 種好
 舞臺
 下サ 十條
 下六 壺
 機
 巨月
 秋四

門茶

うらまへに魚市もくろ門茶は 清水
後摺の白き八咫くろ門茶う乳 古棠
傍の飯煮るも星の門茶は 煙風

北野御手水

六日社政のまゝさきい
七日あり

七夕

はさのちひめ・たきりのひびき・さくうまひびき・七夕つめ
ひあわし・星合・星やうり・星の手向・星の葵・後女
半女・何鼓・女はあそび・をたあそび・ニツ星・いぬあそび
とせりつあ

七夕の夜川を下る 箴うめ 謡美子
七夕や夕飯さゆ人 能あや 清民
七夕やまて高あゆ純まきり 煙風

星今宵

七夕や二輝の子を抱き新瑞を立 合
おまうつる後のくろはくろのめたきん
酒の箱も清浦をまへく星あそび 青栞
うぐいさききり能あやり今宵 下 呂隣

星迎

せり志き女房も出さう星むのく 可箭
赤鷹ハ何もさきくはあむのく 金 文里

星祭

水ゆり露のりして星まわり 下毛 山古
釣虫を新の蒸や新系里 煙風

星合

星合

二ツ星

星

星

星の系

星の別

和合やわらわらせり川の波 由像

星合や月合まきの空のあり 不操

逢ふはあめ晴まのふよ二ツ星 菊枝子

あまのふらあつらふら星 下毛 中葵

河のやれ中とあまや二ツ和 一 菜欣

七月のそまふよ思ふやふら星 葱玉

まわりの影しもあま星の系 下毛 常晴

叶ふら河らや星の系は深 下毛 蕉堂

星の別をわらわらふら星の別 下毛 叶右

秋六

彦星

彦星

彦星

星ノ契

あまの星とあまの星のふら河 下毛 常晴

しほれや河のふら河のふら河 梅葉子

彦星やあまの星の系をわら 孤付

あまの星とあまの星のふら河 下毛 山古

大空の晴れ星のあまの河 下毛 小桂

あまの星とあまの星のふら河 下毛 松風

松風や星のあまの河のふら河 一 菓欣

月とあまの星のふら河のふら河 下毛 糸柳

あまの星とあまの星のふら河 下毛 換糸

天の川

天の川

昭西・昭信・昭洋・皇合の侯伊勢より皇の連ふ交あり

遠くを見よ 近くあやや天の河 佛風
 葵りある星のりあや天の川 弓矢
 文る和らそをりふとせや天の河 葦岳
 黄火しそ下る浅や河まの川 菅麿
 漸のきも河のくふそ天の河 山古
 秋まのら明あき夜を河まの川 上井 真松
 月よそふく遠くふ漸の風天の河 葉居
 大忠のつづく果をあまの川 家静

秋七

妻迎舟

妻あまの舟・妻星のよるころ

鳥鵲の橋

贈 づらうの鳥のよりまの橋も紅葉の橋よりあまの舟あり

よらをもせあひし後をもをくまふもこうくありしを天幕
 いらうそ中をさけく天河を隔てたまふめぞ七月七日はらうを
 ゆりし後ふも鳥鵲の橋をさうく後女をさきやむるも
 川まはら舟よそを心をもはさる歌ふふめ又ふせらるる
 もき紅涙を橋よあまをさる紅葉の橋よりあまの舟又只紅葉よ
 ふめも奇も河の

二星の星祈

あまのよ半ひらぬ衣ひ男のり

庭の立琴

うらやまは横後らぬうかせめあま

むす針

鶯よあまの橋のあまの星田川 甘茶

かきくまの橋をえとよみ流りせし

玉出

二星の屋形

秋去夜

増セタの具あり閉去夜夜浪霞應濕々々も是あり又又秋の夜を云方セタの心も云々して後布の秋き夜夜だを云ううも云々〇秋去夜を云いいそくまゆを武庫の山

名を云々いいも秋去夜の名

雪約

人や秋去夜の名

樹石

かきくまの橋をえとよみ流りせし

拙誠

乞巧奠

乞巧乞巧の系・庭の立琴は星中々ののありセタセタあり〇〇の系・庭の立琴は星中々ののあり乞巧乞巧の系・庭の立琴は星中々ののあり〇〇の系・庭の立琴は星中々ののあり

秋八

乞巧の系・庭の立琴は星中々ののあり〇〇の系・庭の立琴は星中々ののあり乞巧乞巧の系・庭の立琴は星中々ののあり〇〇の系・庭の立琴は星中々ののあり乞巧乞巧の系・庭の立琴は星中々ののあり〇〇の系・庭の立琴は星中々ののあり

願の糸

願の糸の糸の糸の糸

庭の立琴の糸の糸の糸

庭の立琴

庭の立琴の糸の糸の糸

乞巧針

乞巧針の糸の糸の糸

貸小袖

るるねや芋のうもれかき小袖

嶺風

多きぬりちまきうり持るう使小袖

ト毛一飛

硯洗

ちやくもまじり硯もちうりう洗しり

乙也

七箇ノ池

星をあらうよせりのたういよあをいせを鏡をり芋
うもれかきうりちまきをり

うりや七箇の池まうりる星

祐之

梶の葉

梶の葉をさきもも尾ハ手向うぬ

新文

梶の葉まうりかぬ葉の白しん

テハ月忌

梶の葉や書習ふ言も半の角

乙也

芋の葉の露

あせふはあせのあうりよせりの歌をさきももくもりよめ
葉のあを硯洗は清くよあせのあうりよめくもりよめ

秋九

とくく葉の風情あうりる芋のあエト 文志

並く芋入

芋の葉はあせやちうりる風のあめし

有ん

六道本

葉うりあせゆりうり強えつ芋のあ

杉曉

藤井井

芋の葉はあせまうりやせり硯うり

振月子

迎鐘

ねのうちの風うもちうりるいものあ

休右

本陣門

得るあせのあせしん葉をさき芋のあ

春松

年ノ渡り

一年よあせ天の川をさきりるあ
一年よあせりるあ

善松

清水

高は川もさきき芋のあ

由大

海雨

雨あせりるあせりる年の海うり

葉吹

洒淚雨

七日の雨あり六月の雨あり
法車雨と云事

色多秋形もさあんな洒淚雨

善陽

洒淚雨の音もさあんな洒淚雨

作古

本御門跡ノ籠花

七日神ををををををの化物なり

秋風のしほをのそくををを

古嵐雪

飛鳥井家七夕鞠

七夕の鞠や舞を秋布一巻

麦岳

逆ノ峯入

本山を七月當り八月あり
聖護院之宮院の西門に
一世人に及ぶ其の奥金峯山より日本を流る
山伏おそくは属をををををの峰と云
秋のそそ逆の峯と云

秋十

見そめの日和都合や逆の峰

有心

歳をそそ逆の峰

峰風

六道叅

九月十日ありあり
京師の住持東山波羅堂の東六道の珍皇
寺に法を聖妻を逆の峰ををををの峰と云

御馬も控を六道

雪豹

迎鐘

うそおそくをのそくををを

古嵐雪

棋買

是ちたうをうて買ををををを

棋買も控を六道

棋買

清水寺千日詣 十日

中元日

十五日のそそあり中元ををを云

盂蘭盆

増うらなへを。奉仕。施餓鬼日蓮の母餓鬼の申よりて
合するを佛を佛より奉を奉より七月十五日百味五
菓を伎(十方の佛)の佛に奉せぬ母終に合を佛より奉
目蓮仏より奉佛に子の奉を奉よりそのハあきうらを
をかき(うら)の仏大善の(うら)を
そよりうらをハあきを(盂)

蘇買

盂蘭盆や二月めつを海部町

思成

幽穀

うらを奉やうらを奉にぬ脊戸の取

重祐

六箇奉

盂蘭盆や何を何よりする物

相曉

六箇奉

盂蘭盆や二月めつを海部町

常晴

盂蘭盆や何を何よりする物

世貞

盆の月

鉢をくちりて奉の付は奉の月

サカミ 本 穂

おんうらを佛に奉りうらを奉の月

施餓鬼

風をぬきをてはし施餓鬼舟

山 山

玉 祭

聖霊和・和經・いそをき・枝豆・枝さけ・根芽・青苔
あき人の世よきを奉り八月より九月のり一報恩經よき
申す七月のり奉り八月のり一八月のり奉り九月のり奉り
地及罪人の善悪をかあつる日ありしそを士は日及經を
法の供物をうらを奉りて大聖に奉りて餓鬼のうらを
奉りて(事)よきを奉り(觀)よき十四日奉りて奉りて
十六日奉りて奉りて(増)

日を西へ奉りて奉りて奉りて奉りて

意林や奉りて奉りて奉りて奉りて

草市 州市や露の干ぬきを重たきり
 玉柳やむきししけけや月あける
 玉柳やむきししけけや月あける
 玉柳やむきししけけや月あける
 玉柳やむきししけけや月あける

棚經 柳種や着しをみくし飲るころ
 柳種や着しをみくし飲るころ
 柳種や着しをみくし飲るころ
 柳種や着しをみくし飲るころ

迎火 迎火や煙りのまきく州の先
 日の何れもよきをたぐし山家うれ
 むし火よりけしゆるし今世し

秋十二

鼠尾草 鼠尾草をよきしる男ありは二日
 鼠尾草をよきしる男ありは二日
 鼠尾草をよきしる男ありは二日
 鼠尾草をよきしる男ありは二日

迎火 迎火や煙りのまきく州の先
 日の何れもよきをたぐし山家うれ
 むし火よりけしゆるし今世し

枝豆

豆は秋や實をせしむるに於ては
 最尾州の豆は一日に入るや
 豆は秋や實をせしむるに於ては
 備へおくや世州や
 枝豆は未刻のつぎく
 豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は未刻のつぎく
 枝豆は未刻のつぎく
 枝豆は未刻のつぎく

秋十三

枝豆

枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては
 枝豆は秋や實をせしむるに於ては

青蒿

青蒿は秋や實をせしむるに於ては
 青蒿は秋や實をせしむるに於ては
 青蒿は秋や實をせしむるに於ては
 青蒿は秋や實をせしむるに於ては
 青蒿は秋や實をせしむるに於ては

私^シ米^メ

瓜^ウ馬^マ

西^シ瓜^カ

麻^マ壳^カ箸^シ

肘^テ半^ハ

外^{ソト}豆^{マメ}

ひきまやまきり初りの真をれ 秀子子

飯のせれちきりや瓜の馬 甘菜

おきまにわると控りく西瓜の乳 古 去来

おきらせらるる西瓜の汁 金 豊賀

ありとも不用とせしきをのりし 露光

見たりくおき控りく麻壳箸 下 花月

何人の借入神一とをのりし 梅左

切口のよきへ纏り 夢のら 文里

おきまにわるとのりくをのりし 井友

墓^{ツツミ} 叢^{ソウ}

墓^{ツツミ} 叢^{ソウ}

増^{ゾウ}七月初先祖の墓よまうらるるおきもらうらるるのんそく
とのやそらまーよも七月十五日は先祖の墳の城およ
おきまをたきほめ供養まらうら

おきくきやうふおきや夢う書巻 金 龜祐

おきまをむらるるおきま 墓系り 下 葵史

おきまをむらるるおきま 墓系り 下 市猿

おきまをむらるるおきま 墓系り 下 繁嵐

おきまをむらるるおきま 墓系り 下 方泉

おきまをむらるるおきま 墓系り 下 石

おきまをむらるるおきま 墓系り 下 煙

おきまをむらるるおきま 墓系り 下 風

おきまをむらるるおきま 墓系り 下 風

花うらまゝの祠のまゝに墓あり

神もぬき祀りぬきり墓あり

本堂を草を垂して墓あり

むくつ草を移して妻をたか系

生身玉

るあり

こゝのまゝのまゝに生身玉

旅のうへおをむいあー生身玉

蓮の飯

花の葉をそぎ蒸して搦飯を詰ると親吉州を刺す
あまを餅りて買ふは供物をさしきり膳をとりて祝殿

秋十五

文里

井友

梅左

菓飲

唯風

蓮海

箸さしに膳をとりたり蓮の飯

おひのう好はありる蓮の飯

風流の中よあはりたる飯

刺鱈やあえたりおひの祝ひ

き鱈や甲しき鱈の祝ひ

いりしものまむ刺鱈のこころ

き鱈やあ親持と牙の果報

刺鱈やまのうへおあぬきりて家

乙也

月大

生岳

高あ

膳系

素竹

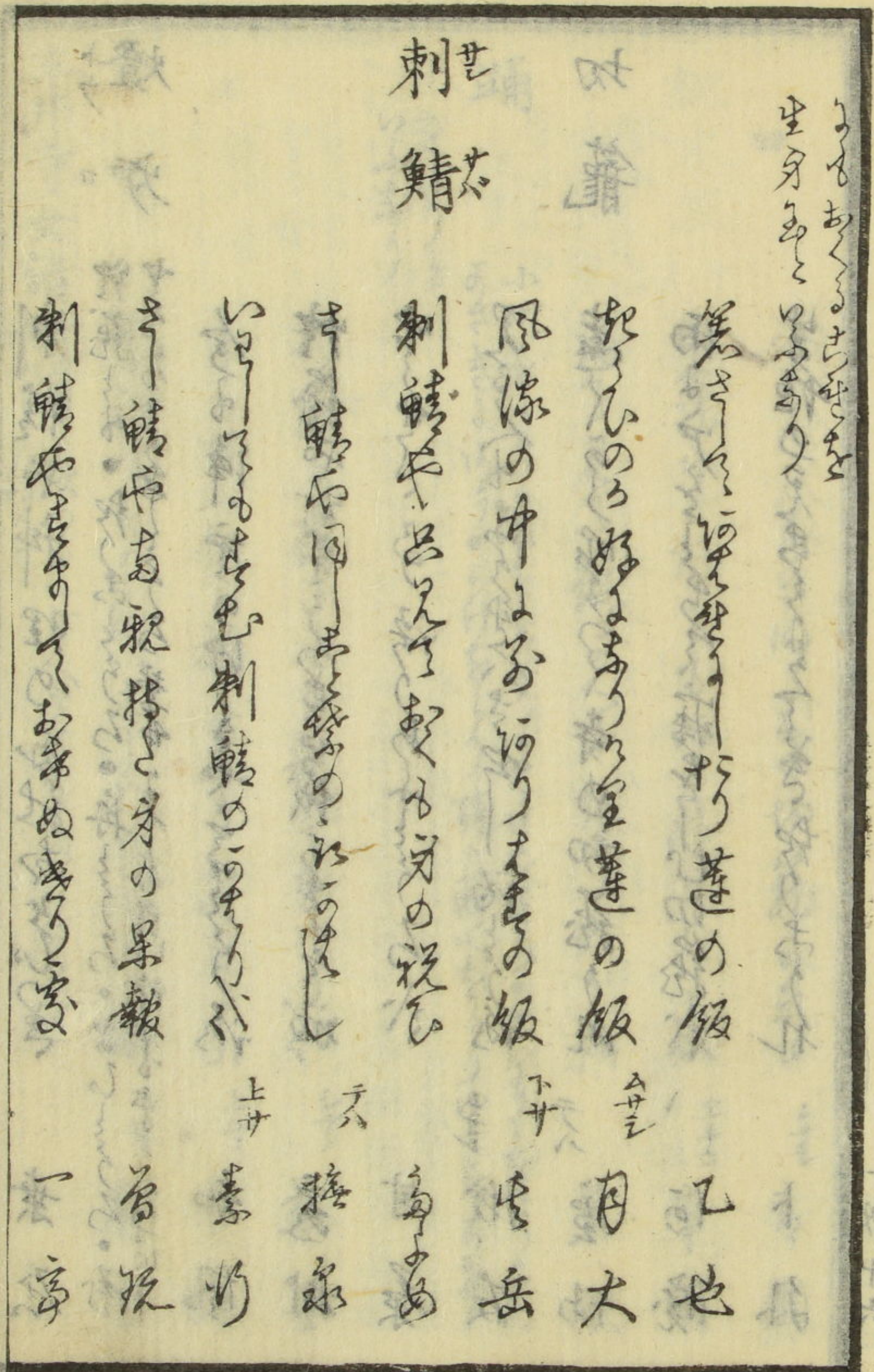
旨祝

一亭

刺鱈

うもあくるさしを
生身ありりあり

叶



燈^{トウ} 炉^ロ

刺帳や料理のあはれおむつき

葉倉

燈籠も・灯りも・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も

今も津守のけさやささるる

知風

燈籠や灯をいんぎん袋のきき袖

露村

燈籠をいんぎん袋のきき袖

甘茶

遠くへの灯りも・寺の切籠り

機友

雨よ戸をもちて・燈籠をいんぎん袋

河橋

生煙のいんぎん袋のきき袖

ト外

切籠

秋十六

切籠

切籠り・燈籠も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も

常晴

切籠り・燈籠も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も

菓欣

切籠り・燈籠も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も

蕉堂

踊

小町をいんぎん袋のきき袖

いんぎん袋

切籠り・燈籠も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も

由像

切籠り・燈籠も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も

庭花

切籠り・燈籠も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も

三井寺女詣

十五日・切籠り・燈籠も・舟も・舟も・舟も・舟も・舟も

庭花

三井寺へ此の日の曠や女子遊 一亭

晩鐘も余は女の子の三井詣 素力

志すやあや被るもの三井詣 巢吹

三井寺やそらへハ掛ふ女と也 優々

衝突入

三井寺は日向の法云は信じて入るとあるよそ秘蔵せし書物
送具の何れかハ中家の娘根妻妻のいふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
勢山山田の信じて入るとあるよそ秘蔵せし書物
ふと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
兄弟の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

衝突入のりし返向より返り 燈 下毛 一飛

衝突入や人を押せり 分賞

秋十七

法に入や出たや知りし事と也 般若 唯風

經木流

十六日播磨四天王寺の東儀坊のあり龜井のありし經木の
表の法名を志す 龜井のありし經木のありし經木のありし經木の
是經木を平教傳のありし法名を志す
ヒ意のこゝろ切法を修すあり

信のり舟をよしくる 經木う丸 永年

送火

圍十日月・施火・門火・大文字の火・香店火・舟形の火
妙法の史記より今日夜東山傳の山上薪を以て大文字を志
すは字畫凡草のありし事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
望の親しむる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
横川・兼二草と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
是の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
何の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
山上の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
是の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
結同別は火と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

の二字を真し或ハ舟形ハ舟形の火を真し阿含の阿含の山岳形
の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し
阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含
の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

送る火やうい送る火の信とり 金仙友
おくりややうい送る火の信とり 古史邦

大文字 山の輝の二重のもももも大文字 古岩雪

妙法の火 妙法の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

妙法の火やうい送る火の信とり 金仙友
妙法の火やうい送る火の信とり 古史邦

妙法の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

妙法此火の信とり 山岳形の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し

妙法の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

門火 妙法の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

八幡安居頭 妙法の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

解夏草 妙法の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

夏書納 妙法の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

花火 妙法の火を真し阿含の阿含の山岳形を真し阿含の阿含の山岳形を真し

丹珠の雲間よりくま火の丸 心星

露のなき村木をまけるおまじ 葉居

地藏祭

廿四日壬午六地藏ありとて壺の灯籠を
おまつりあり

穂屋

廿七日佐州山杖山集り宿の種まき作る種屋ありむりふ
物候をまきくかの種屋といふ名敷のよめは新に飯屋を
作らるあり種屋を種屋をくくるあり新式紙抄よ云々
作らるあり種屋のよめあり諏訪の祭に年中七十五夜けりその
一あり

相撲

いよりの相撲をたれり種屋伝り
ホタテ 由 儿

来廣ききし息をまき種屋伝り
ムセ 和 者

印上村八神風より種屋伝り
優 人

秋十九

相撲

増 八月十日の相撲お撲公達よまひあせり種屋の伝り
の人をめぐりらるる七月は相撲のせらとていひて天子の御覧を
うらみあり万葉はお撲伝とてありあり伝りむあせり種屋の
中をめぐり伝りのありあり [軍歌] 寛平七年の事をお撲を
まきつる事あり相撲の秋よりありあり八月の御覧を
あせり今も世よりいふは伝りて打ちつるせらとていひて
ありあり

あきあきをまきくくま火の丸 花居
おまじを暖み多きおまじをいふ 唯 風
夕月や二百十日の人魚 里 素 月
塩の菓もあせり二百十日の祭 テハ 雲 山
あせり江や二百十日のあせり 葉 居

二百十日

あせり江や二百十日のあせり 葉 居

露

白露・うら露・波り露・袖の露

霧

霧の海・霧の色・袖の霧・霧の立ち・霧の立ち人・霧雨
目も立ち霧の立ち

秋二十

水ぬくをゆく 霧の立ち 花露

遠山灯の立ち 霧の中 花露

叶成るはまを 霧の立ち 花露

むく空を 霧の立ち 花露

木ももふ 霧の中 花露

霧の立ち 霧の中 花露

霧の立ち 霧の中 花露

霧の立ち 霧の中 花露

夕霧

夕霧の立ち 霧の中 花露

稲妻

稲妻の立ち 霧の中 花露

残暑

残暑の立ち 霧の中 花露

残暑

残暑の立ち 霧の中 花露

残暑の立ち 霧の中 花露

朝夕の秋に葉は舞落るの事
外

嵐の寒よ吹のけり海岸の静寂
峰

秋のまじり日暮さぬまじり
上毛 白

初嵐 初嵐の時休さぬや初嵐
秋

布ささぎのうたげの神は
永年

初嵐の音のこゝろ集のしるしあり
下毛 麓

傳ふまじりの静の秋は
庭

身入 月言ふつらさる身入あり
如

身入お山の暮を海の暮
葉

秋廿一

冷 ヒヤカ

身入志むや樹のうらさるるの事
不

身入しむさるるあらしあり
峰

身入や表ののちまじりあり
一字

冷 ヒヤカ
思ひ得る友歌へ入るる中後法をさるるは被歌更ふまじり余く予
必やいふあり
必やいふあり

身入のまじりあり
身入

身入のまじりあり
身入

集歌

初涼の扇を過ぎては雨 ヒタチ

山吹の障子を過ぎては雨 ムツ

初涼

扇 初涼の扇を過ぎては雨 ヒタチ

扇 初涼の扇を過ぎては雨 ヒタチ

書や茶室の扇を過ぎては雨 ヒタチ

扇置

扇置の扇を過ぎては雨 ヒタチ

扇置の扇を過ぎては雨 ヒタチ

扇置の扇を過ぎては雨 ヒタチ

秋廿二

江のりくは眼を過ぎては雨 素山

扇置の扇を過ぎては雨 葉交

扇置の扇を過ぎては雨 葉交

團扇置 文種

扇置の扇を過ぎては雨 葉交

木撞 葉交

扇置の扇を過ぎては雨 葉交

扇置の扇を過ぎては雨 葉交

扇置の扇を過ぎては雨 葉交

秋廿二

茶花

男郎花

藻白をちりちりして依りてあへりて云ふ又あるはちりてあへりて云ふ

花の心名のやきき花や男郎一葉葉子

伸ぬ花の風情をせりてあへりて云ふ一竹

余の竹をよきまのまのり男郎一ト丹一亭

伸ぬ花の心名のやきき花や男郎一ト丹一亭

ほろりと果てきき花や男郎一ト丹一亭

おもしろくもくもくはしき花や男郎一ト丹一亭

花の心名のやきき花や男郎一ト丹一亭

花の心名のやきき花や男郎一ト丹一亭

朝顔

草半花

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

夕風やきき花や男郎一ト丹一亭

萩

萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、

萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、

萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、

秋廿五

萩 殿 蘭

萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、

萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、

萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、
萩の秋も日毎のそは実よほり、

萩

藤袴

葉の邊に古人の衣の裾の如く
葉の邊に古人の衣の裾の如く
葉の邊に古人の衣の裾の如く

赤山子
袴成

葉の邊に古人の衣の裾の如く

赤山子

葉の邊に古人の衣の裾の如く

袴成

葉の邊に古人の衣の裾の如く

袴成

葉の邊に古人の衣の裾の如く

袴成

葉の邊に古人の衣の裾の如く

下サ

袴成

葉の邊に古人の衣の裾の如く

袴成

芭蕉

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

下サ

不由

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

不由

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

不由

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

不由

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

下サ

不由

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

下サ

不由

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

下サ

不由

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

下サ

不由

根をさしけり 葉廣く 葉の邊に

下サ

不由

小車の花
桔梗

耳を色や芭蕉より雨の音
下サ
方糸
波路
小車もや寺にしろあき屋の庭
ちかがり
けりのおろき
山風を著るるを一桔梗は
芳州
枯枝をやしむる何ほしきむら
其
遊水
秋のせぬ斗より桔梗うれ
下サ
庭花
苦うもあり 終るるまをうら

秋廿七

狗子草

秋種をほくすいぬの尾より
栗のいねはあし

秋の種

馬の首乃少りくくは
大子草
種をほくすいぬの尾より
大子草
馬の首乃少りくくは
大子草
種をほくすいぬの尾より
大子草

萩

さく萩の萩のうら風負使云い勢のよき萩ハ萩のうら
ハ萩あり種をほくすいぬの尾より
下あき
萩の葉

雨さすも萩の葉
萩の葉
萩の葉
萩の葉

芥子草

隣へは次舟きうしし萩の春 上気 心星
 漁濱の灯影いし辛了 テハ 拾泉
 萩ややまをたねや世一 トサ 庭花
 岸宮うけい トサ 庭花
 矢口より出る トサ 庭花
 相撲草 トサ 庭花
 朝夕の露をおも トサ 庭花
 星雲 トサ 庭花

秋廿八

蕃椒

組一葉の風ややくせつ トサ 庭花
 おく トサ 庭花
 辛き トサ 庭花
 秋風 トサ 庭花
 花 トサ 庭花
 若 トサ 庭花
 赤 トサ 庭花
 秋 トサ 庭花
 青 トサ 庭花

華のまはれ 赤やあきふりき日如
たまにや 暇よきもの 花つぐま
下甘
蓮のまはれ 赤やのまけ 坊の留吉
花つぐま 赤やのまけ 赤瓜 柿
生うまか 海ちまや 垣のうら表
けまを あひよや 種よく入
桃ノ實 桃のまや 皮ふちのま味のみし
麦岳
木瓜実 木瓜のまや 皮ふちのま味のみし
佳岳

秋三十一

蜀漆花 葉よまをいし 木む山の蜀漆の花
優
槐ノ花 葉よまをいし 木む山の蜀漆の花
種好
早田 早稲のまや 皮ふちのま味のみし
芳州
室のまや 蜀漆のまや 皮ふちのま味のみし
種好
是米種をいし 蜀漆のまや 皮ふちのま味のみし
成長のまをいし 蜀漆のまや 皮ふちのま味のみし
ハ種をいし 蜀漆のまや 皮ふちのま味のみし
うらうら 蜀漆のまや 皮ふちのま味のみし
花つぐま 蜀漆のまや 皮ふちのま味のみし
下甘
稲の花 葉よまをいし 木む山の蜀漆の花
種好

殘蚊

残き夏の味下をくちや移のを スリ 孝彦
 土埃おの水よのをさしひのむ トサ 采女
 跡の蚊と名のそぞろくをあり信 トサ 蕙玉
 跡の蚊の暑侍のゆりやまぐ トサ 吉壽
 のちの蚊の暑の癖のうはくくる トサ 八九雄
 跡の蚊や裾の透るるハ重侍 トサ 花酒
 跡の蚊や茶の癖の夜半の枕え トサ 叶南
 のちの蚊の暑るる急ふ雨ねうれ トサ 葉弓
 跡の蚊の暑るる急ふ雨ねうれ トサ 孝喉

秋世二

鯛 ヒタラシ

秋ノ蟬
 秋ノ蝶
 秋ノ螢

鯛や夏蘭ふよをささくこのる トサ 蓬海
 日さらしの物もゆかりの赤のおく トサ 宅就
 赤の赤きりよ遠し秋のせき トサ 呂隣
 こちやのけふ秋のや情のあり トサ 瑤毒子
 紺を巻る勢の中よも秋の蝶 トサ 花海
 せきりあのもむらむ何や秋のてふ トサ 怪養
 赤の赤し人あき秋のあさうれ トサ 弓壽
 飛ぶくちのちのち秋の螢うあ トサ 三郎
 南風よちよきく秋の隣うれ トサ 采女

蜻蛉

せきりあききや秋をきく心
かきとよなる秋のきや午のり
雨の木をたたく秋のり
蜻蛉のきりきりきりきり
蜻蛉のきりきりきりきり
日をはくもいきききりきり
蜻蛉のきりきりきりきり
種好
赤雨
古
田
像
水
心

松虫

松の木のてしきりきりきり
松の木のてしきりきりきり
松の木のてしきりきりきり
松の木のてしきりきりきり
松の木のてしきりきりきり
松の木のてしきりきりきり
松の木のてしきりきりきり
松の木のてしきりきりきり

茶の総果

鈴魚

鈴魚のてしきりきりきり
鈴魚のてしきりきりきり
鈴魚のてしきりきりきり
鈴魚のてしきりきりきり
鈴魚のてしきりきりきり
鈴魚のてしきりきりきり
鈴魚のてしきりきりきり
鈴魚のてしきりきりきり

蚕

蚕のてしきりきりきり
蚕のてしきりきりきり
蚕のてしきりきりきり
蚕のてしきりきりきり
蚕のてしきりきりきり
蚕のてしきりきりきり
蚕のてしきりきりきり
蚕のてしきりきりきり

二條のやぶりりしをちりくを
 却る城人の友やきましくを
 高のきまよりあやちりく寸
 新りし子の夜よあまきけ
 茶 茶月
 茶葉のちり白ふやちりく寸
 テハ 新園
 けりせをせ さしひつはさるもあまきけ
 如 秋
 蝨 斯 是を修らまきりしきくをちりあり 獲 虫 一 六月の中
 りふらあまきりしきりしやちりく寸ヨシキル 古 俗をきまきりし
 と云小籠に入せあまきりし小児の顔しきりしきりしきりし
 ちりく寸大あまきりしきりしあまきりしギイハと云ハあまきりしきりし
 歳亦あまきりし亦ギイストともあまきりしきりしきりしきりし
 秋世四

中のぎまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 結緯の二文字をきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし

ねりまきりし 促縁のきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 結縁のきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 促縁のきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 けりあまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 茶 茶月
 茶葉のちり白ふやちりく寸
 テハ 新園
 けりせをせ さしひつはさるもあまきり
 如 秋
 蝨 斯 是を修らまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 りふらあまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 と云小籠に入せあまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 ちりく寸大あまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 歳亦あまきりし亦ギイストともあまきりしきりしきりしきりしきりし
 秋世四

竈 馬
 竈 馬

けりあまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 茶 茶月
 茶葉のちり白ふやちりく寸
 テハ 新園
 けりせをせ さしひつはさるもあまきり
 如 秋
 蝨 斯 是を修らまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 りふらあまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 と云小籠に入せあまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 ちりく寸大あまきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし
 歳亦あまきりし亦ギイストともあまきりしきりしきりしきりしきりし
 秋世四

蛭カワキ

茶豆虫

曹虫

子の戸をいし、飛ちり、蝶りり、
 かうらきや、美の、遊の、上、
 蝶の、あ、月、光、新、蝶、う、れ、
 居、あ、う、う、う、ま、ま、ま、
 隣、の、う、う、う、の、ん、あ、り、
 数、あ、う、う、う、け、
 於、
 終、夜、耳、を、ま、ま、ま、
 曹、虫、内、の、う、う、う、
 秋、卅、五

蠟 螂

卵カワキの、う、う、う、の、果、あ、り、
卵、う、う、う、

蠟 螂、う、う、う、

い、う、う、の、う、う、う、

蠟 螂、の、う、う、う、

の、う、う、う、の、う、う、う、

藻 住 虫

増、我、の、う、う、う、
 室、の、う、う、う、
 の、う、う、う、
 室、の、う、う、う、
 藻、の、う、う、う、

藻、の、う、う、う、
 室、の、う、う、う、
 藻、の、う、う、う、

藤のつるもあつらふる 命の乳 新月子

あつらふるもあつらふる 命の乳 懐父

藤のつるもあつらふる 命の乳 雲駒

管巻虫

【箋】江戸の徳ネイトと云中書スウイトンと云ふは、
露の如く中書りも純潔なり、尻は細なり又あき物なり
種族の異あり申元の時後夜書は、暗く中書り紡車をま
くりまくり冥土の徳ネイトをさるる途と云又ナイ子ヨと云ふ

くくやあや 形あつらふる 命の乳 相左

あつらふるもあつらふる 命の乳 佳音

稻舂

一と稲屋冥土の徳ネイトと云ふは、
長く首は長り首のくくやあやの鳥帽子をさるる途
柿を掛るくくやあやのくくやあやの鳥帽子をさるる途
あつらふるもあつらふる 命の乳 書と蟹と

秋廿六

のくくやあやのくくやあやの鳥帽子をさるる途

稲舂やあつらふる 命の乳 佳音

稲舂やあつらふる 命の乳 高島

あつらふるもあつらふる 命の乳 沾花子

あつらふるもあつらふる 命の乳 揺籃子

あつらふるもあつらふる 命の乳 東波月

あつらふるもあつらふる 命の乳 ヒタチ 素月

あつらふるもあつらふる 命の乳 小島 環

あつらふるもあつらふる 命の乳 八 麦香

虫

葉丸

養虫

風の思ふよしを虫に思ふ一虫の意 イッ 乙
 戸のさしに寐れよ易し虫に宿 テハ 雪山
 掃くはくく鳴くはくく鳴くはくく鳴く ハ 灌河
 鳴虫より子来よつやうの響面 下サ 十條
 養虫一の鳴きよあつたか 一 亭
 鳴虫の鳴きよか ハ 律の ハ 律
 養虫やあつたよ ハ 秋の ハ 秋
 鳴虫一の鳴きよ ハ 秋の ハ 秋
 養虫やあつたよ ハ 秋の ハ 秋
 鳴虫一の鳴きよ ハ 秋の ハ 秋
 養虫やあつたよ ハ 秋の ハ 秋
 鳴虫一の鳴きよ ハ 秋の ハ 秋

秋廿七

養

養虫の鳴きや雨の月ゆり 糖 月子

冬 蝨

甲 虫 送 元

この虫はあつたよ ハ 冬 ハ 冬
 おとろへや夜あつたよ ハ 虫 ハ 虫
 養虫の鳴きよ ハ 冬 ハ 冬 トモ 一 ハ 冬
 征古籍近 ハ 田 ハ 田 ハ 送 ハ 送
 虫 ハ 虫 ハ 虫 ハ 虫 ハ 虫
 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田
 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田
 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田
 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田
 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田 ハ 田

鱈ニイラ

鱈出中の又尾小し一一解一下下魚あり味良く也
下品あり三四尺一の九九お浦一多くあるを

秋世八

蚯蚓鳴

蚯蚓鳴るるも虫送る
川限り田の虫送るも虫送る
炬火のぬ風や田の虫あくる
虫の飛も此節もさる虫送る
子と田をよまめ一後やさる鳴
と起きと寝きと海し蚯蚓ハ
居まれば人まを夜あまみらる
鳴るるも月や蚯蚓の近きも
山雪 種好

塔物一二宗大坂一の二二年より
東より一ある

旅一のしるはを解の味も
飛得

慶暑一節

七月の中あり

鷹鳥一祭

鷹鳥を祭る夏暑の候七月の廿一日
を喰んと欲するを先代を
子時一先代ををるのしを
用く一我を行ふと六時の合一は

鳥屋出鷹

鳥屋出鷹一反毛をうけ
松風よりむく鷹の音屋出う
梅葉子
宋式
峰風

鷹山別

鷹の巣をこをりま

鷹の山別

鷹の山別 鷹の山別 鷹の山別

鷹の山別 鷹の山別 鷹の山別

鷹の山別 鷹の山別 鷹の山別

鷹の山別

鷹の山別 鷹の山別 鷹の山別

鷹の山別

鷹の山別 鷹の山別 鷹の山別

鷹お

鷹お 鷹お 鷹お

鷹お 鷹お 鷹お

鷹の山別 鷹の山別 鷹の山別

鷹の山別 鷹の山別 鷹の山別

初鷹

初鷹 初鷹 初鷹

初鷹 初鷹 初鷹

初鳥狩

初鳥狩 初鳥狩 初鳥狩

鳩吹

鳩吹 鳩吹 鳩吹

山も唐をく
たのきも云り

山

鳩のまきのまきやたつと表のうけ 葉穂子

鳩の上のまきのまきやたつと表のうけ 葉穂子

鳩のみの尻目よりや神の毒 豆ん

鳩の平入りまきのまきやたつと表のうけ 雪約

鳩のみのまきのまきやたつと表のうけ 古棠

鳩のまきのまきのまきやたつと表のうけ 一飛

鳩のまきのまきのまきやたつと表のうけ ト外

熱^{アツ}麦^{ムキ}やまきのまきのまきやたつと表のうけ 祐之

秋四十

焼 米

焼米やまきのまきのまきやたつと表のうけ 米穂

やまきのまきのまきのまきやたつと表のうけ 文里

焼米やまきのまきのまきやたつと表のうけ 下サ

やまきのまきのまきのまきやたつと表のうけ 米有

焼米やまきのまきのまきやたつと表のうけ 上サ

秋ノ空 寐轉をんまきのまきやたつと表のうけ 公成

秋ノ空 夜まきのまきのまきやたつと表のうけ 尤像

秋ノ山 天如くまきのまきのまきやたつと表のうけ 不

秋ノ日 秋の目まきのまきのまきやたつと表のうけ 上在

秋ノ日

秋の日は沈まると志望も田の風情

双岳

秋ノ山

春野の青中より秋の山

葉居

秋ノ空

空を渡る鳥の影は秋の山

雲

秋ノ水

水は流れてゆく秋の水

下

舟の影は水に映る秋の水

峰

旅の足音は石を踏む秋の水

古

秋の水は清冽な香りを運ぶ

去

